

平成29年度

名取市内遺跡 発掘調査報告書

2019年3月
名取市教育委員会

平成29年度

名取市内遺跡
発掘調査報告書

例 言

1. 本書は平成29年度国庫補助事業により実施した「市内遺跡発掘調査事業」に伴う発掘調査報告書である。
2. 本事業の調査及び整理作業を含む報告書作成は名取市教育委員会 文化・スポーツ課 文化財係が行い、同係職員の相澤清利、大村周一が下記の分担により執筆し、本書の編集は大村が行った。また、岡版作成等は各担当者が行い、佐藤友希・安孫子礼美の助けを得た。
第Ⅰ章・第Ⅱ章1～15、第Ⅱ章17、18：大村周一
第Ⅱ章16：相澤清利
3. 報告書に掲載してあるテキスト・挿図・写真等については、原則としてデジタルデータをもとに作成したものである。
4. 標高はT. P.（東京湾平均海面高度）を使用した。
5. 本書で使用した上色表記については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準上色帖』に準じる。
6. 本事業の調査記録及び報告書作成に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）
恵美昌之 太山昭夫 宮城県教育庁文化財課
7. 本事業の調査記録及び出土遺物等の資料については、名取市教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

調査要項

1. 調査主体：名取市教育委員会
2. 調査担当：名取市教育委員会教育部 文化・スポーツ課 文化財係
3. 調査体制：調査員
　　鍋崎哲也、北條由佳
　　調査補助員（嘱託職員）
　　相澤清利、大村周一
4. 調査一覧：第1表参照
5. 発掘作業員： 7名
6. 整理作業員： 2名

目 次

| | | |
|-----|-----------------|----|
| I. | 平成29年度の市内遺跡調査事業 | 1 |
| II. | 調査成果 | |
| 1. | 鹿野遺跡 | 3 |
| 2. | 高畠遺跡 | 4 |
| 3. | 辻山遺跡 | 5 |
| 4. | 北宮神明遺跡 | 6 |
| 5. | 東内館遺跡 | 7 |
| 6. | 清水遺跡 | 8 |
| 7. | 野来遺跡 | 9 |
| | 第1調査地 | 10 |
| | 第2調査地 | 11 |
| 8. | 上余山遺跡 | 11 |
| | 第1調査地 | 12 |
| | 第2調査地 | 14 |
| 9. | 北野窯跡 | 16 |
| 10. | 町裏遺跡 | 17 |
| 11. | 下余山遺跡 | 19 |
| | 第1調査地 | 19 |
| | 第2調査地 | 20 |
| | 第3調査地 | 21 |
| | 第4調査地 | 22 |
| 12. | 本村遺跡 | 23 |
| 13. | 北原上戸敷跡 | 24 |
| 14. | 寺山遺跡 | 25 |
| 15. | 鰐野坂遺跡 | 26 |
| 16. | 山下遺跡 | 27 |
| 17. | 貞山堀 | 35 |
| 18. | 山の神遺跡 | 36 |

写真図版

報告書抄録

I. 平成29年度の市内遺跡調査事業

平成29年度における、開発等に伴う埋蔵文化財の発掘届の受理件数は、発掘届が40件、発掘通知が8件であり、宮城県教育委員会による指示事項の内訳は、発掘調査25件、工事立合23件であった。発掘調査については、平成23年度より主に市内遺跡発掘調査事業（国庫補助事業）で調査に対応している。平成29年度には、平成27年度以前に届出・通知が提出されていたものを含め、鹿野遺跡、高畠遺跡、塙山遺跡、北宮神明遺跡、東内館遺跡、清水遺跡、野米遺跡、上余田遺跡、北野窯跡、町裏遺跡、下余田遺跡、本村遺跡、北原上屋敷跡、寺山遺跡、飯野坂遺跡、山下遺跡、貞山堀、山の神遺跡の18遺跡を対象とした23件の調査を実施している(第1表・第1図)。本書はこれらの発掘調査成果を報告するものである。なお、調査要項は第1表にまとめ、各節では省略した。また、同一遺跡で複数回の調査を行っている場合には、調査日の早い順に第1調査地、第2調査地…の順に番号を付したが、あくまでも本書中のみの番号である。

第1表 平成29年度 調査一覧表

| 地図番号 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 担当者名 | 調査原因 |
|------|--------|--------------------------------------|----------------------------|------------------------|-------|----------------|
| 1 | 鹿野遺跡 | 高瀬吉田字上屋東86-6, 86-13, 86-16の各一部 | 2017.7.27, 28 | 12 | 北條 | 個人住宅新築 |
| 2 | 高畠遺跡 | 高瀬吉田字馬35-2の一部 | 2017.7.4 | 6 | 北條 | 個人住宅新築 |
| 3 | 塙山遺跡 | 高瀬吉田字塙山30 | 2018.3.28 | 5 | 鶴崎・大村 | 個人住宅新築 |
| 4 | 北宮神明遺跡 | 高瀬吉田字北宮神明132-10 | 2017.11.27 | 3.75 | 鶴崎 | 個人住宅新築 |
| 5 | 東内館遺跡 | 高瀬吉田字東内館地内 | 2017.12.11 | 12 | 鶴崎・大村 | 排水路の改修工事 |
| 6 | 清水遺跡 | 田高字南36 | 2017.11.24 | 38 | 鶴崎 | 通信エリア新幹線沿線対策工事 |
| 7 | 野米遺跡 | 高瀬吉田字野米65-33 | 2017.5.16 | 15.84 | 北條 | 個人住宅新築 |
| 8 | 野米遺跡 | 高瀬吉田字野米52-3 | 2018.1.18 | 4 | 鶴崎 | 個人住宅新築 |
| 9 | 上余田遺跡 | 上余田字千刈田404の一部, 404-2 | 2017.5.9 | 18 | 北條 | 共同住宅新築 |
| 10 | 上余田遺跡 | 上余田字市坪446の一部 | 2017.8.2, 3 | 9 | 北條・大村 | 個人住宅新築 |
| 11 | 北野窯跡 | 愛島塙手字北野153 | 2017.10.24 | 9.9 | 鶴崎・大村 | 通信エリア新幹線沿線対策工事 |
| 12 | 町裏遺跡 | 増田2丁目550 | 2017.12.6, 7 | 12 | 鶴崎・大村 | 個人住宅新築 |
| 13 | 下余田遺跡 | 下余田字中荷653-1 | 2017.5.18 | 9.2 | 北條 | 個人住宅新築 |
| 14 | 下余田遺跡 | 下余田字瓶塙388-1 | 2017.6.1 | 4.5 | 北條 | 個人住宅新築 |
| 15 | 下余田遺跡 | 下余田字中荷646-1 | 2018.2.14, 15 | 7.5 | 鶴崎 | 個人住宅新築 |
| 16 | 下余田遺跡 | 下余田字瓶塙547-3 | 2018.3.6 | 9 | 鶴崎 | 個人住宅新築 |
| 17 | 本村遺跡 | 社せきのした3丁目6-5, 6-6, 6-7 | 2018.1.15, 16 | 20.25 | 鶴崎 | 共同住宅新築 |
| 18 | 北原上屋敷跡 | 高柳字北原上地内 | 2017.9.7 | 5.25 | 鶴崎 | 市道路改良工事 |
| 19 | 寺田遺跡 | 小塙原字西中塙89 | 2018.1.24 | 4 | 鶴崎 | 個人住宅新築 |
| 20 | 飯野坂遺跡 | 飯野坂5丁目12-1 | 2018.3.7 | 5 | 鶴崎 | 共同住宅新築 |
| 21 | 山下遺跡 | 飯野坂4丁目425-1, 433-1, 433-2, 433-6の各一部 | 2017.5.29-31 2017.6.5-7 | 90 | 相澤・大村 | 共同住宅新築 |
| 22 | 貞山堀 | 下増田字北原東・台林地内 | 2017.8.31 | 12 | 北條・大村 | 橋の架け替え工事 |
| 23 | 山の神遺跡 | 本郷字矢口96-2 | 2017.11.28, 29 | 9.5 | 鶴崎・大村 | 個人住宅新築 |

第1図 平成29年度 市内道路発掘調査事業 開査地位置図



II-1. 鹿野遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図1)

鹿野遺跡は、市内西部の南北に連なる高館丘陵の北東端から東に張り出す丘陵の麓に立地する遺跡である。宮城県遺跡地名表（以下、遺跡地名表と略す）には縄文時代の散布地として登録されている。これまで、本格的な調査が行われていないため、遺跡の様相は明らかではない。周辺には真坂遺跡や東真坂遺跡、鹿野東遺跡など、縄文時代の遺跡が複数所在する。今回の調査地は遺跡の南端付近に位置する。

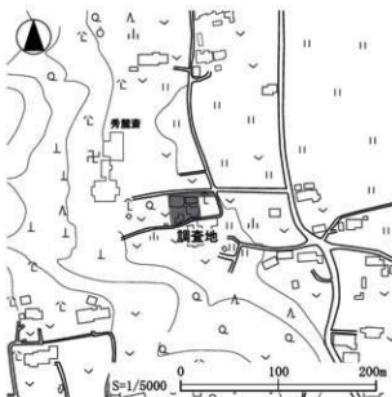
(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年7月27日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年8月2日付、文第1075号）に基づいて、同年7月27・28日に実施した。住宅新築予定地の中央に3×4mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を開始し、現地表下70cmで地山を確認した。III層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い、2日間の調査を終えた。

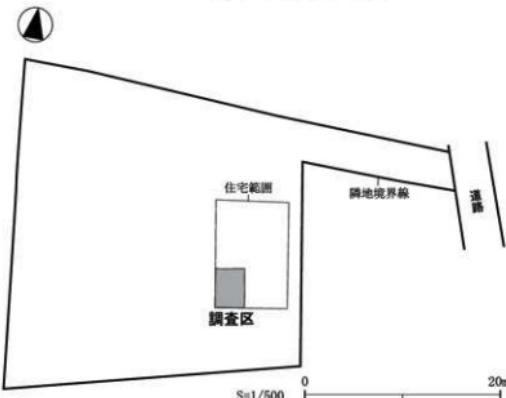
(3) 調査成果

①基本層序 層厚40cmの褐色シルトの碎石が混じる盛土（I層）、層厚30cmの褐色シルトの旧表土（II層）、附黄褐色砂礫の地山（III層）の順に確認した。

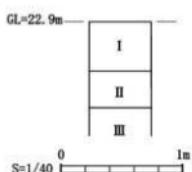
②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第1図 調査地位位置図



第2図 調査区配置図



| 基本層 | | | | |
|-----|-----|---------------|-----|---------|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 造成土 | 褐色(10YR4/4) | シルト | |
| II | 旧表土 | 褐色(10YR4/1) | シルト | 木の根等を含む |
| III | 地山 | 明黄褐色(10YR6/6) | 砂礫 | |

第3図 層序模式図

（4）まとめ 頭著な遺構・遺物は発見されず、表土直下で砂礫層を検出したことから、後世の削平を受けているものと考えられる。

II-2. 高畠遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図2)

高畠遺跡は、仙台市との境界付近の県道仙台岩沼線の西に隣接して所在し、旧名取川・旧増田川により形成された自然堤防上に立地する。東西約800m、南北約600mの範囲に広がる。遺跡地名表には弥生時代、古墳時代、古代の散布地として登録されている。これまで、木格的な調査が行われていないため、遺跡の様相は明らかではない。今回の調査地は遺跡の北東付近に位置する。

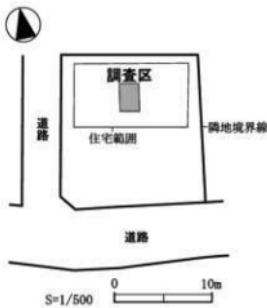
(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年6月23日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年6月28日付、文第774号）に基づいて、同年7月4日に実施した。住宅新築予定地に2×3mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下50cmで地山を確認した。III層上面で構造検出を行い、図面作成の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚50cmの盛土（I層）下で、黄橙色シルトの地山（II層）を検出した。以下、明黄褐色シルト（III層）、明黄褐色砂質シルト（IV層）の堆積を確認した。

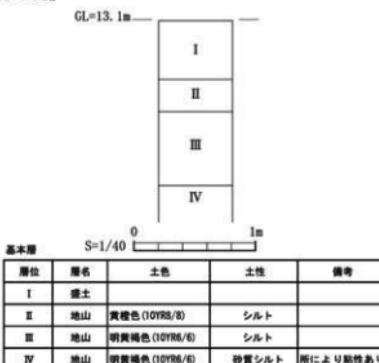
②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第2図 調査区配置図



第1図 調査地位置図



第3図 層序模式図

(4) まとめ 頗る著しい遺構・遺物は発見されず、盛土直下で地山を検出したことから、後世の削平を受けているものと考えられる。

II-3. 痕跡遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図3)

痕跡遺跡は、仙台市太白区に隣接して所在し、旧名取川・旧増山川により形成された自然堤防上に立地する。東西約90m、南北約150mの範囲に広がる。遺跡地名表には古代の散布地として登録されている。平成25年度の2件の調査では頗著な遺構や遺物は発見されず(註)、遺跡の様相は明らかではない。今回の調査地は遺跡の北端付近に位置する。

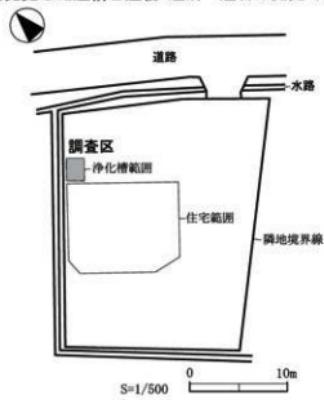
(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年11月27日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知(同年12月1日付、文第2043号)に基づいて、平成30年3月28日に実施した。浄化槽新設予定地に2×2.5mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下80cmで地山を確認した。IV層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚10~38cmの黒褐色砂質シルトの表土(I層)、黒褐色砂質シルト(II層)、にぶい黄褐色砂質シルト(III層)、褐色砂質シルトの地山(IV層)の順に確認した。

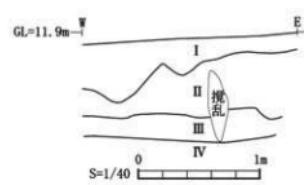
②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第2図 調査区配置図



第1図 調査地位置図



| 基本層 | | | | |
|-----|-----------------|--------------|-------|----|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 表土 | 黒褐色(10YR3/1) | 砂質シルト | |
| II | 黒褐色(10YR3/2) | 砂質シルト | | |
| III | にぶい黄褐色(10YR4/3) | 砂質シルト | | |
| IV | 褐色(10YR4/4) | 砂質シルト | | |

第3図 北壁断面図

(4)まとめ 旧名取川が形成した自然堤防を構成するI層を確認した。

(註) 名取市教育委員会2015『平成25年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第63集

II-4. 北宮神明遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図4)

北宮神明遺跡は、仙台市太白区に隣接して所在し、旧名取川・旧増山川により形成された自然堤防上に立地する。東西約100m、南北約700mの範囲に広がる。遺跡地名表には古代の散布地として登録されている。これまで、本格的な調査が行われていないため、遺跡の様相は明らかではない。今回の調査地は遺跡の北東端付近に位置する。

(2) 調査に至る経緯と経過

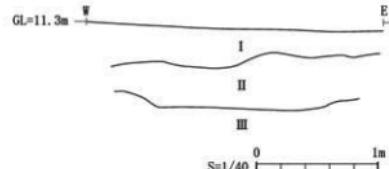
今回の調査は、平成29年10月31日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年11月8日付、文第1841号）に基づいて、同年11月27日に実施した。浄化新設予定地に1.5×2.5mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下60cmで地山を確認した。Ⅲ層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(3) 調査成果

- ①基本層序 層厚20~38cmの黒褐色砂質シルトの表土（Ⅰ層）、黒褐色砂質シルトの擾乱層（Ⅱ層）、褐色砂質シルトの地山（Ⅲ層）の順に確認した。
- ②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第2図 調査区配置図



| 基本層 | | | | |
|-----|----|--------------|-------|----|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 表土 | 黒褐色(00YR8/2) | 砂質シルト | |
| II | 擾乱 | 黒褐色(00YR2/3) | 砂質シルト | |
| III | 地山 | 褐色(10YR4/4) | 砂質シルト | |

第3図 北壁断面図

- (4)まとめ 地山面は後世の擾乱により削平されていることが判明した。

II-5. 東内館遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図5)

東内館遺跡は、県道名取川山線の南に隣接して所在し、旧名取川・旧増山川により形成された自然堤防上に立地する。東内約300m、南北約90mの範囲に広がる。遺跡地名表には古墳時代後期・古代の散布地として登録されている。これまで、本格的な調査が行われていないため、遺跡の様相は明らかではない。今回の調査地は遺跡の北端付近に位置する。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年11月14日付で提出された排水路改修工事計画に伴う発掘通知に対する宮城県通知（同年11月29日付、文第1998号）に基づいて、同年12月11日に実施した。排水路改修工事予定地の2ヶ所に $1.6 \times 2.5\text{m}$ のトレンチを設定し、東から順に1トレンチ、2トレンチとした。

バックホーによる表土除去の後、現地表下70~120cmで地山もしくは遺構面を検出したため、精査したところ、各トレンチで旧河川跡を検出した。図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

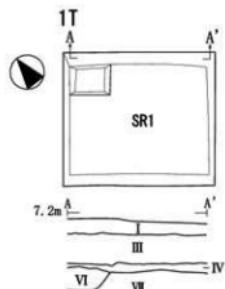
(3) 調査成果

①基本層序 層厚10~20cmの暗褐色シルトの表土（I層）、層厚20cmの暗褐色シルト（II層）、灰色砂質シルト（III層）、褐色粘土（IV層）、にぶい黄褐色粘土質シルト（V層）、明黄色砂と褐色砂質シルトが互層に堆積する流路下層（VI層）、径10~80mmの礫を多く含む褐色粘土質シルトの旧河床（VII層）の順に確認した。II層から下層は旧河川堆積層と推測される。

②発見した遺構と遺物

SR1 河川跡

1トレンチでは、東西2.8m以上、南北1.8m以上で深さ120cm以上、2トレンチでは、東西2.4m以上、南北1.8m以上で深さ60cm以上の旧河川跡を検出した。遺物は出土していない。



| IT基本層 | | | | |
|-------|--------|--------------------------------|------------|-----------------------------------|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 表土 | 暗褐色 (10YR3/3) | シルト | |
| II | 旧河川堆積層 | 灰色 (7.5Y5/1) | 砂質シルト | |
| IV | 旧河川堆積層 | 褐色 (10YR4/1) | 粘土 | |
| VI | 旧河川堆積層 | 明黃褐色 (10YR8/6) 褐色 (10YR6/1) | 砂 砂質シルト | 流路下層、互層に堆積する |
| VII | 旧河川堆積層 | 褐色 (10YR6/1) | 粘土質シルト | 径10mm~80mmの礫を多く含む、酸化鉄の集積が認められる河床面 |



第1図 調査地位置図

第2図 1T平面・北東壁断面図



第3図 2T平面・北東壁断面図

(4)まとめ 遺物が伴わないので時期は不明だが、トレンチ全体がII河川跡の堆積土である。今後、周辺の調査の際には、このII河川跡の年代・規模・範囲の把握に留意したい。

II-6. 清水遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図6)

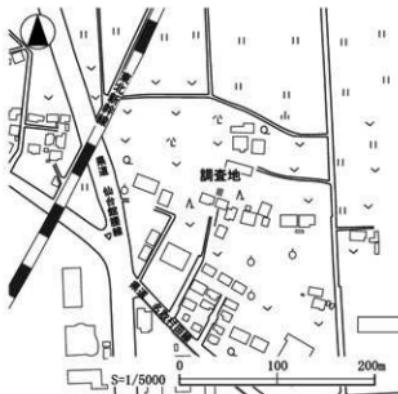
清水遺跡は、JR名取駅から北北西約1.5kmを中心とし、東西約750m、南北約450mの範囲に広がる。旧名取川・旧増田川により形成された標高9m前後の自然堤防上に立地し、周囲の後背湿地との比高差は約1mである。遺跡地名表には弥生時代前期～後期、古墳時代前期～後期、奈良時代・平安時代の集落として登録されている。昭和49年から昭和53年まで4次にわたりて東北新幹線の建設に伴い宮城県教育庁文化財保護課による発掘調査が行われた。その結果、古墳時代前期から平安時代の堅穴住居跡や井戸跡が多数発見されており、古墳時代前期に集落が営まれ、奈良時代に大規模な集落が形成されていたことが明らかにされた。また、奈良・平安時代の遺構からは円筒窓や瓦、木製の独楽や竹製の横笛など、一般集落ではみられないものが発見されている(註)。今回の調査地は、遺跡の中央付近に位置する。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年9月7日付で提出された通信エリア新幹線沿線対策工事計画に伴う発掘届に対する宮城県通知(同年9月13日付、文第1391号)に基づいて、同年11月24日に実施した。鉄塔建設予定地に4×9.5mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表土20cmで地山を確認した。II層上部で遺構検出を行い、岡面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

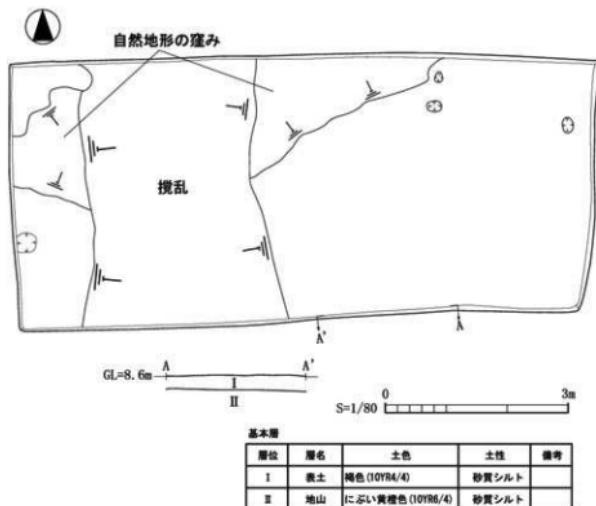
(3) 調査成果

①基本層序 層厚20cmの褐色砂質シルトの表土(1層)、にぶい黄褐色砂質シルトの地山(II層)の順に確認した。



第1図 調査地位置図

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第2図 平面・南壁断面図

(4)まとめ 自然地形の窪みを確認した。

(註)宮城県教育委員会1981『東北新幹線関係遺跡調査報告書－V－』宮城県文化財調査報告書第77集

II-7. 野来遺跡

遺跡の概要（第1調査地—I・第1表・第1図7、第2調査地—同8）

野来遺跡は、JR名取駅から北西約1kmの地点を中心とし、東西約150m、南北約450mの範囲に広がる。旧名取川・旧増田川により形成された標高8～9m前後の自然堤防上に立地し、一部後背湿地の区域も含まれる。遺跡地名表には弥生時代から古代の集落として登録されている。遺跡の東部は原遺跡と隣接し、北側には清水遺跡がある。平成27年の確認調査では古代以降の竪穴住居跡2軒をはじめ、溝跡や掘立柱建物跡の遺構が検出され（註1）、昨年度の確認調査でも近世以前の溝跡やピットを検出している（註2）。今回の調査地は、第1調査地は遺跡の中央東端付近、第2調査地は遺跡の南端付近に位置する。



第1図 調査地位置図

第1調査地

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年4月7日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年4月12日付、文第101号）に基づいて、同年5月16日に実施した。住宅新築予定地に4.8×3.3mのトレーナーを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下120cmで地山を確認した。Ⅲ層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(2) 調査成果

①基本層序 層厚80cmの盛土（I層）、黄灰色シルトの旧水田耕作土（II層）、明黄褐色シルトの地山（III層）の順に確認した。遺構はⅢ層上面で検出した。

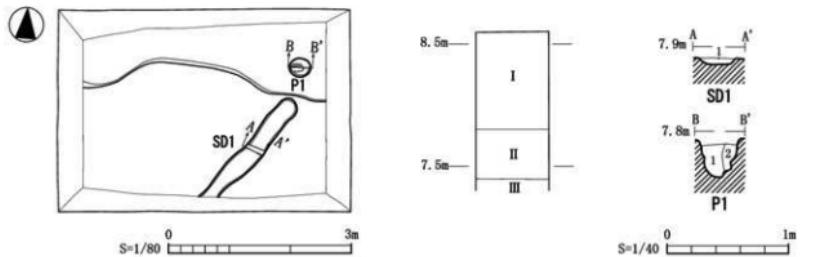
②発見した遺構と遺物

SD1 溝跡

トレーナーの南東部で検出した北東から南西方向の溝跡で、南はトレーナー外へと延びている。重複関係はない。確認できた長さは2mで、上幅0.3m前後、下幅0.2~0.3m前後、深さ10~30cmである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

P1柱穴

トレーナーの北東部で検出した。重複関係はない。平面形は円形で直径0.34m、深さ30cmの柱穴である。堆積土は抜取り穴が灰黄褐色粘土質シルトで、掘方堆土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。



| 基本層 | | | | | SD1, P1 | | | | |
|-----|--------|---------------|-----|----|---------|-----|-----------------|--------|----------------------|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 | 層位 | 遺構名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 盛土 | | | | 1 | SD1 | にぶい黄褐色(10YR7/2) | 粘土質シルト | 地山ブロックを多く含む |
| II | 旧水田耕作土 | 黄灰色(2.5Y5/1) | シルト | | 1 | P1 | 灰黄褐色(10YR6/2) | 粘土質シルト | 抜取り穴、上部に地山ブロックを多く含む |
| III | 地山 | 明黄褐色(10YR6/6) | シルト | | 2 | P1 | にぶい黄褐色(10YR7/3) | シルト | 掘方堆土、褐灰色粘土質シルト土を少量含む |

第3図 平面・層序模式図、SD1・P1断面図

(3)まとめ 溝跡1条と柱穴1基を検出したが、遺物は伴わず時期は不明である。

第2調査地

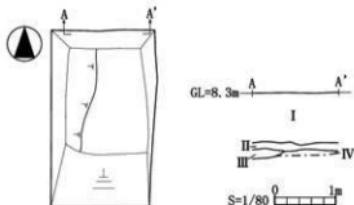
(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成30年1月5日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知(同年1月12日付、文第2353号)に基づいて、同年1月18日に実施した。住宅新築予定地に1.6×2.5mのトレチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下約100cmで地山を確認した。IV層上面で構造検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(2) 調査成果

①基本層序 層厚80cmの宅地駐車場造成時の盛土(I層)、褐灰色粘土質シルトの旧水田耕作土(II層)、灰黄褐色粘土質シルトの搅乱(III層)、明黄褐色シルトの地山(IV層)の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



| 基本層 | | | | |
|-----|--------|---------------|--------|--------|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 盛土 | | | |
| II | 旧水田耕作土 | 褐灰色(10YR6/1) | 粘土質シルト | |
| III | 搅乱 | 灰黄褐色(10YR6/2) | 粘土質シルト | I層起源の土 |
| IV | 地山 | 明黄褐色(10YR6/6) | シルト | |

第4図 平面・北壁断面図

(3)まとめ トレチの西半部は後世の搅乱を受けていた。

(註1) 名取市教育委員会2017『平成27年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第68集

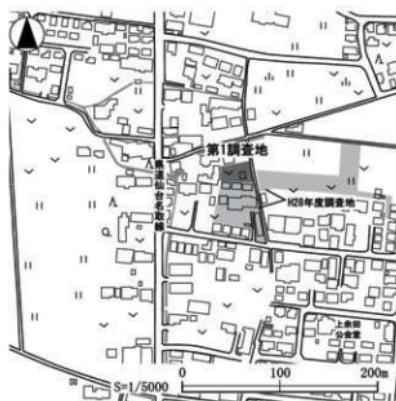
(註2) 名取市教育委員会2018『平成28年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第69集

II-8. 上余田遺跡

遺跡の概要(第1調査地—I・第1表・第1図9、

第2調査地—同10)

上余田遺跡は、JR名取駅から北北東約1.3kmに所在し、東西約300m、南北約500mの範囲に広がる。近世の奥州街道、近代以降の山陽道4号線沿いにある。増田の現市街地から延びる南北方向に形成された最奥の浜堤列(第1浜堤)上や、旧名取川・旧増田川により形成された標高7~8m前後の自然堤防上に立地する。遺跡地名表には弥生時代、古墳時代前期、古代の集落および散布地として登録されている。これまで、開発に伴い確認調査や木調査が数回にわたり行われている。平成28年度に行われた市坪地区の土地区画整理に伴う発掘調査では、古墳時代前期から平安時代の堅穴住跡38軒のほか、柵跡、土壙、溝跡、井戸跡等が多数検出され、縄文時代晩期から中世までの遺物が出土している。その結果、縄文時代晩期から近世の長期にわたって、人々の暮らしが営まれた遺跡であることが分かった(註)。今回の調査地は、第1調査地は遺跡の北東付近、第2調査地は遺跡の南西付近に位置する。



第1図 調査地位位置図

第1調査地

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年4月20日付で提出された共同住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年4月28日付、文第230号）に基づいて、同年5月9日に実施した。住宅新築予定地に3×6mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下100cmで地山を確認した。II層上面で造構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(2) 調査成果

①基本層序 層厚100cmの盛土（I層）、にぶい黄褐色砂質シルトの地山（II層）を検出した。以下、黒褐色シルト（III層）の堆積を確認した。

②発見した遺構と遺物 今回の調査では、溝跡3条、性格不明造構3基を検出した。遺物は図示はしていないが、II層上面から土師器壺口縁部・体部の破片が2点、土師器壺体部の破片が15点出土した。須恵器壺は体部～底部の破片が3点出土し、底部にはヘラ切りのものがみられる。

SD 1溝跡

トレンチの南側で検出した東西溝跡で、東・西がトレンチ外へと延びている。SD 1と重複し、これより占い。確認できた長さは2.7mで、上幅約0.9m、下幅約0.7m、深さ約20cmである。底面は平坦で断面形は皿状である。堆積土は褐灰色シルトの単層である。遺物は図示はしていないが、I層からロクロ調整の土師器壺の体部破片が2点、非ロクロ調整の土師器壺の破片が3点、須恵器壺口縁部～体部の破片が1点、須恵器の長頸瓶・壺体部の破片がそれぞれ1点出土している。

SD 2溝跡

トレンチの北側で検出した南北溝跡で、北はトレンチ外へと延びている。SD 3、SX 2・3と重複し、これらより占い。確認できた長さは3.5mで、上幅1m前後である。堆積土は黒褐色シルトの単層で、地山が斑状に混入することから人為的堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

SD 3溝跡

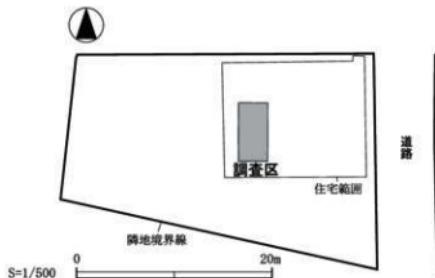
トレンチの中央部で検出した東西溝跡で、東・西がトレンチ外へと延びている。SD 2、SX 2と重複し、前者より新しく、後者より占い。確認できた長さは2.8mで、上幅0.6～1m、下幅約0.4m、深さ20～40cmである。底面はほぼ平坦で壁はやや内湾しながらやや急角度で立ち上がる。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物はI層から底部へラ切りの須恵器壺の破片（第4図1、写真図版II-1）が出土している。

SX 1性格不明造構

トレンチの東壁際で検出した溝状の落ち込みである。東がトレンチ外へと延びている。SD 1と重複し、これらより新しい。規模は長軸1.4m以上、短軸0.8mである。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SX 2性格不明造構

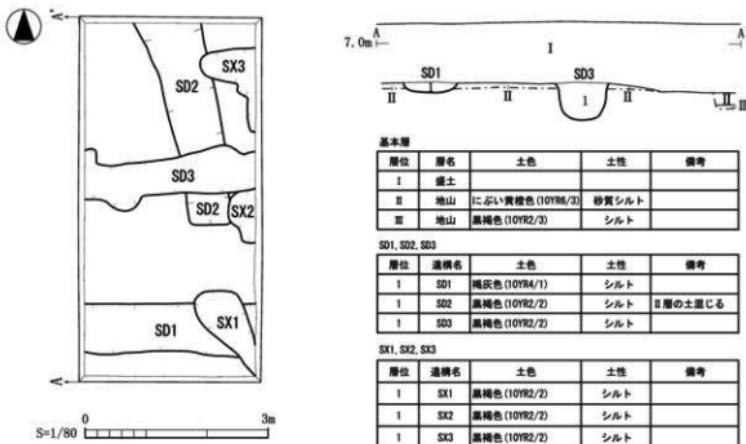
トレンチの東壁際で検出した不整形の落ち込みである。東がトレンチ外へと延びている。SD 2・3と重複し、これらより新しい。規模は南北0.8m、東西0.5m以上である。堆積土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。



第2図 調査区配置図

S X 3 性格不明遺構

トレンチの東壁際で検出した不整形の落ち込みである。東がトレンチ外へと延びている。SD 2 と重複し、これより新しい。規模は南北1.4m、東西0.9m以上である。堆積上は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。



第3図 平面・西壁断面図



| 番号 | 調査区 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 部位 | 特徴 | | 法量(cm) | | | 備考 | 写真 番号 | 登録 番号 |
|----|-----|-----|----|-----|----|----|---------------------|-------|--------|-------|----|------|----------|----------|
| | | | | | | | 外観 | 内面 | 口径 | 底径 | 厚さ | | | |
| 1 | IT | SD3 | 1層 | 須恵器 | 坪 | 底部 | 体部：ロクロナデ 底部：ヘラ切り | ロクロナデ | (8.2) | (0.8) | | II-1 | R1 | |

第4図 出土遺物

(3)まとめ 今回の調査では溝跡3条と性格不明遺構3基を発見した。SD 1・3からは平安時代の土師器や須恵器の破片が出土しており、平安時代以降の溝跡と考えられる。SD 2は重複関係からSD 3、SX 2・3よりは古いで平安時代かそれ以前の可能性もある。SX 1～3は堆積上が類似しておりI層にも似ていることから、比較的新しい時期のものである。

昨年度に実施した確認調査では、今回の調査地の東側と南側において湿地帯が確認されたことから、その広がりの把握が目的でもあったが、確実に湿地帯と言える上層は確認できなかった。本調査区周辺は微高地と湿地帯の境界付近に位置するものと推定され、検出した溝跡は集落の縁辺部に作られたものと考えられる。

第2調査地

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年7月27日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年8月2日付、文第1076号）に基づいて、同年8月2・3日に実施した。住宅新築予定地に2×4.5mのトレーナーを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下40~50cmで地山を確認した。III層上面で造構検出を行い、各造構を半裁・完掘して図面作成し、記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(2) 調査成果

①基本層序 層厚20~30cmの宅地造成盛土（I層）、層厚10~25cmに於ける黄褐色砂質シルトの旧耕作土（II層）、明黄色シルトの地山（III層）の順に確認した。

②発見した造構と遺物

S I 1 壺穴状造構

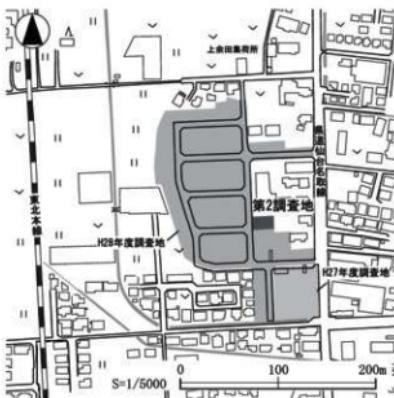
トレーナーの南壁付近で検出した壺穴状造構である。南側がトレーナーへ続くことと東側がSD 1に切られているため全体の形状は不明だが、平面形は隅丸方形を呈していたものと考えられる。SD 1と重複し、これより古い。確認できた規模は、東西3.3m以上、南北0.8m以上である。底面は平坦で壁の立ち上がりはやや急であり、深さ約10cmである。堆積土には於ける黄褐色砂質シルトの単層であり自然堆積土と考えられる。トレーナー中央南壁際でP 1が検出されている。柱痕跡ではなく、直径20cmの楕円形を呈し、深さ30cmである。堆積土は地山を含む暗褐色シルトの単層である。遺物は1層からロクロ調整の土師器坏（第8図1、写真図版11-2）が出上している他、図示はしていないが、土師器細片が10点出土している。

SD 1溝跡

トレーナーの東部で検出した南北溝跡で、溝の内側部分のみの確認である。S I 1と重複し、これより新しい。確認できた長さは2.1mで、上幅0.6~1.3m、下幅約0.5m、深さ50cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に分けられ、1層は下部に石や土器片が混じる暗褐色シルト、2層は地山が混じる暗褐色シルトであり、ともに自然流入土と考えられる。遺物は1層下部から須恵器壺部下半の破片（第8図3、写真図版11-4）が出上している他、2層下部から古墳時代中期の土師器壺口縁～体部の破片（同図2、同図版11-3）が出上している。また、図示はしていないが堆積土中から古墳時代前期の円窓のある高坏もしくは器台の脚部の破片、非ロクロ調整の土師器小片が20点出土している。

SK 1 土壙

トレーナーの中央部北壁際で検出した楕円形の土壙である。重複関係はない。規模は長径0.6m、短径0.5m、深さ40cmである。断面形はU字形である。堆積土は2層に分けられる。1層は地山が少量混じる暗褐色シル



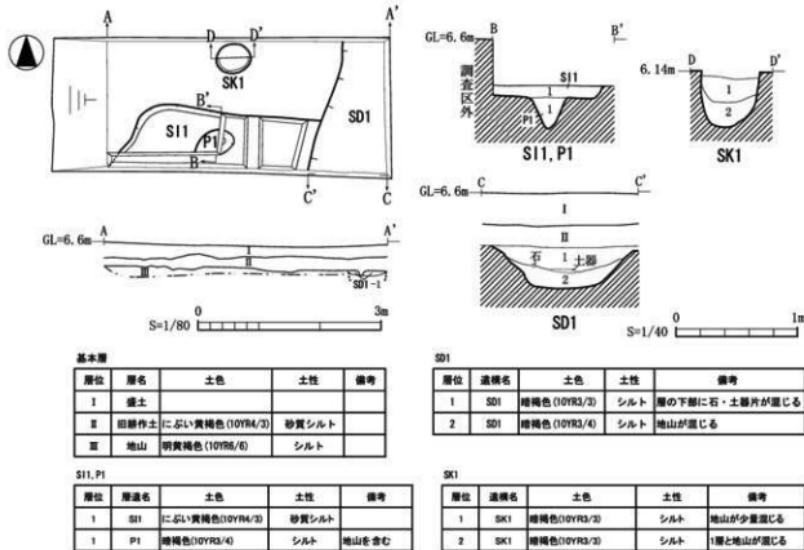
第5図 調査地位置図



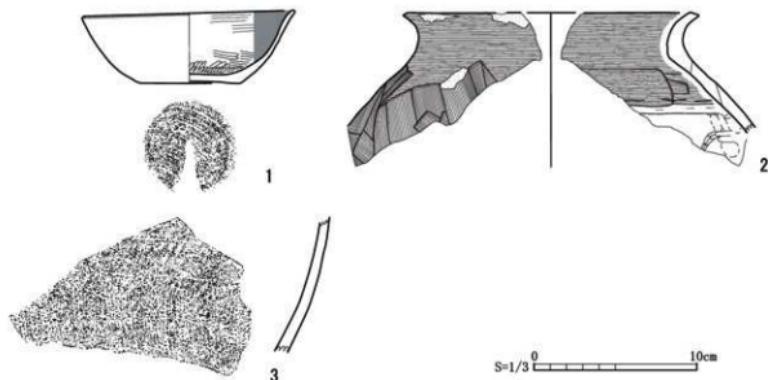
第6図 調査区配置図



ト、2層は1層と地山が混じる暗褐色シルトであり、ともに人为的堆積土と考えられる。遺物は図示していないが、堆積土中から非クロロ調整の壺もしくは甕の底部の破片が2点、土師器壺体部の破片が8点出土している。



第7図 平面・北壁断面・SII-P1-SD1-SK1断面図



| 番号 | 調査区 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 基準 | 部位 | 特徴 | | 法量(cm) | 備考 | 写真 図版 番号 | |
|----|-----|-----|----|-----|----|-------|----------------|---------|--------|-------|----------------|---------|
| | | | | | | | 外側 | 内側 | | | | |
| 1 | IT | SII | 1層 | 土師器 | 坏 | 口縁～底部 | ロクロナデ、底部：回転丸切り | 黒色處理 | (13.2) | 8.0 | 4.5 | 11-1 RI |
| 2 | IT | SD1 | 2層 | 土師器 | 壺 | 口縁～体部 | ロクロナデ | 体部：ヨコナデ | (18.0) | (7.0) | 赤ロクロ | 11-2 R2 |
| 3 | IT | SD1 | 1層 | 土師器 | 壺 | 体部下半 | ロクロナデ～ケズリ | ロクロナデ | (3.3) | | | 11-4 R3 |

第8図 出土遺物

(3) まとめ 今回の調査では堅穴状遺構1軒、ピット1基、溝跡1条、土壙1基を検出した。S I 1はほとんどが調査区外へ延びているため、全体の形状は不明であるが、堅穴住居の可能性がある。P 1もこれに伴う施設と考えられる。年代は、出土した土師器窯の特徴から平安時代としておく。SD 1から出土した遺物は古墳時代～古代と時間幅をもち、いずれも破片であることから周辺より流れ込んだものと考えられる。遺構の重複関係からSD 1はS I 1よりも新しく、平安時代以降の溝跡と考えられる。SK 1からは土師器片が数点出土しているが、詳細な時期は不明なもの、暗褐色を基調とする堆積土である点でSD 1と共に通しており、同じ時期の可能性がある。

上余田遺跡では今回の調査地周辺で堅穴建物跡を含む多数の遺構を検出しており、S I 1もこれらに伴う集落の一部とみられる。周辺の消水遺跡や沢日遺跡でも調査成果が蓄積されてきており、これらを総合的に検討し、集落の広がりや時期毎の変遷を明らかにすることが今後の課題と言える。

(註) 名取市教育委員会2018『上余田遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第70集

参考文献

名取市教育委員会2017『平成27年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第68集

名取市教育委員会2018『平成28年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第69集

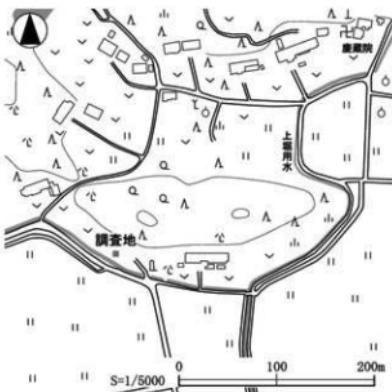
II-9. 北野窯跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図11)

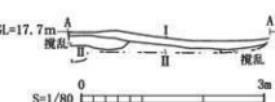
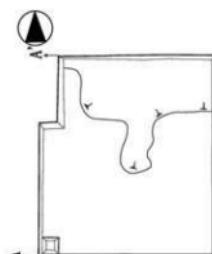
北野窯跡は、市内西部の南北に連なる高館丘陵から東に張り出す、標高50m以下の愛島丘陵群北部の小規模な段丘の斜面に立地する。東西約600m、南北約300mの範囲に広がる。北側には隣接して南台窯跡があり、本来は一連の遺跡と考えられる。遺跡地名表には平安時代の窯跡として登録されている。これまで、本格的な調査が行われていないため、遺跡の様相は明らかではない。今回の調査地は遺跡の南東端付近に位置する。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年9月7日付で提出された通信エリア新幹線沿線対策工事計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年9月13日付、文第1390号）



第1図 調査位置図



| 基本層 | | | | |
|-----|----|--------------|-----|--------------|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 表土 | 黒褐色(10YR3/2) | シルト | |
| II | 地山 | 褐色(10YR4/6) | 粘土 | 風化縫を含む、第Ⅲ紀の層 |

第2図 平面・西壁断面図

に基づいて、同年10月24日に実施した。鉄塔建設予定地に3×3.3mのトレーナーを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下10cmで地山を確認した。Ⅱ層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚約10cmの黒褐色シルトの表土（I層）直下で風化礫を含む第III紀の層である褐色粘土の地山（II層）を確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。

(4) まとめ 表土直下で第III紀の粘土層を検出したことから、後世の削平を受けていると考えられる。

II-10. 町裏遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図1)

町裏遺跡は、JR名取駅から南約600mを中心とし、東西約150m、南北約500mの範囲に広がる。標高5~5.5mの第I浜堤列上に立地する。遺跡地名表には古代の散布地として登録されてきたが、平成16年度の仙台空港アクセス鉄道の整備に伴う発掘調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、土器埋設遺構3基、溝跡6条、平安時代の竪穴住居跡1軒、溝跡2条、中世の掘立柱建物跡3棟、柵列4条、土壇塗10基、溝跡1条がそれぞれ発見された。この3時期の遺構群はさらに2~3段階の変遷が認められている（註1）。今回の調査地は町裏遺跡の北側付近に位置し、平成26年度調査地は西に隣接する（註2）。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年11月20日付で提出された個人住宅2軒の新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年11月29日付、文第1994号）に基づいて、同年12月6・7日に実施した。住宅新築予定地の2ヶ所に2×3mのトレーナーを設定し、東から順に1T、2Tとした。バックホーによる表土除去の後、現地表下120~150cmで地山を確認した。V層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い、2日間の調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚20~30cmの表土（I層）、層厚40~80cmの盛土（II層）、層厚20~70cmの碎石（III層）、植物遺体をわずかに含む暗褐色粘土質シルトの湿地堆積土（IV層）、灰オリーブ色砂質シルトの地山（V層）の順に確認した。

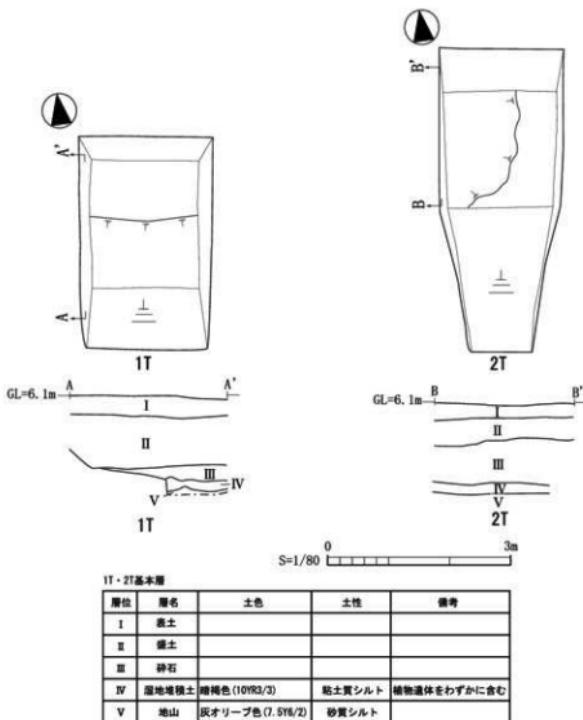
②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第1図 調査位置図



第2図 調査区配置図



第3図 1T平面・西壁断面図、2T平面・西壁断面図

(4)まとめ 平成26年度に西隣で行われた確認調査では、溝跡4条と土壤1基が検出されている。また、平成27年度に北の近接地で行われた確認調査では、遺構の希薄な区域であると推定された。本調査地は平成16年度の調査地から北に約150m離れており、この付近は遺跡の中心からやや離れた区域と推測される。

(註1) 名取市教育委員会2012『町内遺跡・鶴巻前遺跡・下畠田飯塚占墳群他』名取市文化財調査報告書第60集
 (註2) 名取市教育委員会2016『震災復興事業周辺発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第65集

II-11. 下余田遺跡

遺跡の概要（第1調査地—I・第1表・第1図13、第2調査地—同14、第3調査地—同15、第4調査地—同16）

下余田遺跡は、JR名取駅から東北東約1.7kmを中心とし、東西約1.5km、南北約1.3kmの範囲に広がる。旧名取川により形成された標高が5～6mの自然堤防上に立地する。遺跡地名表には、弥生時代中期、古墳時代前・中期、古代の集落跡として登録されている。これまでに開発に伴う発掘調査が数回実施されており、平成9年度に実施した農業倉庫建設に伴う発掘調査では、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒、古代の堅穴住居跡5軒、中世の掘立柱建物跡15棟が検出され、土器・須恵器のほか、弥生時代や中世の遺物も僅かに出土している（註1）。また、昨年度の調査により、旧名取川の河川跡と推定されるものが複数検出された（註2）。今回の調査地は、調査地1、3が遺跡の南西端付近に、調査地2が遺跡の東部中央付近に、調査地4が遺跡の南東隅付近に位置する。



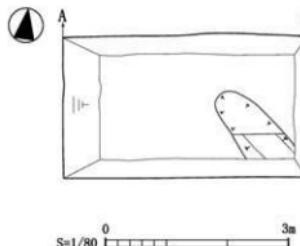
第1図 調査位置図

第1調査地

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年5月16日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年5月24日付、文第468号）に基づいて、同年5月18日に実施した。住宅新築予定期に4×2.3mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下120cmで地山を確認した。Ⅲ層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(2) 調査成果



第2図 調査区配置図

| 基本層 | | | | |
|-----|--------|----------------|----|----|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 盛土 | 暗青灰色 (SR3/1) | 粘土 | |
| II | 旧水田耕作土 | 淡黃褐色 (7.SY8/4) | 粘土 | |
| III | 地山 | 淡黃褐色 (7.SY8/4) | 粘土 | |

第3図 平面・北壁断面図

①基本層序 層厚90cmの盛土（Ⅰ層）、層厚30cmの暗青灰色粘土の旧水田耕作土（Ⅱ層）、浅黄褐色粘土の地山（Ⅲ層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。

（3）まとめ 本調査区西側で平成27年度に実施した調査では耕作痕と考えられる小溝状遺構が検出されていることから（注3）、調査地一帯は生産域であったと推定される。

第2調査地

（1）調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年4月6日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年4月12日付、文第102号）に基づいて、同年6月1日に実施した。浄化槽新設予定地に3×1.5mのトレーニングを設定し、バックホーによる表土除去の後、現地表下180～200cmで地山を確認した。Ⅲ層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行った調査を終えた。

（2）調査成果

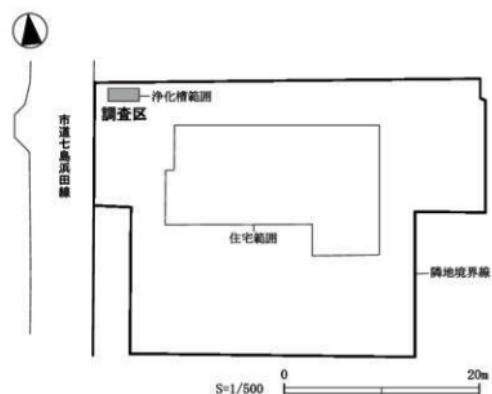
①基本層序 層厚約70cmの表土（Ⅰ層）、層厚約100cmの盛土（Ⅱ層）、一部がグライ化しているにぶい黄褐色砂質シルトの地山（Ⅲ層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。

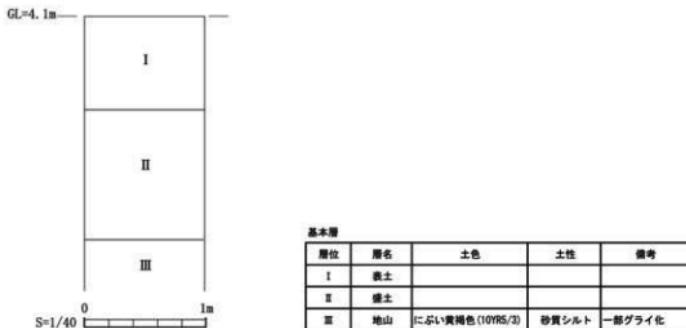
（3）まとめ 本調査区北隣の平成27年度調査地では地山上面の大半が擾乱を受けており、上層は削平されていた。今回の調査地も盛土直下で地山を検出し、かつトレーニングの半分が擾乱を受けている。



第4図 調査地位置図



第5図 調査区配置図



第6図 層序模式図

第3調査地

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成30年1月10日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年1月17日付、文第2375号）に基づいて、同年2月14・15日に実施した。住宅新築予定地に2.5×3mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下140cmで湿地堆積土を確認した。IV層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い、2日間の調査を終えた。

(2) 調査成果

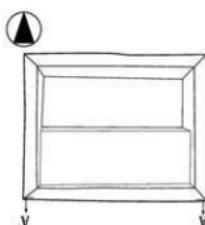
①基本層序 層厚約50cmの暗褐色シルトの現畑作耕作土（I層）、層厚10~40cmの山砂盛土（II層）、

層厚約50cmの砂利盛土（III層）、オリーブ黒色粘土質シルトの湿地堆積土（IV層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第7図 調査位置図



第8図 平面・南壁断面図

(3)まとめ 盛土直下で湿地堆積土を確認したことから、後世の削平を受けていると考えられる。

第4調査地

(1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成30年1月25日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年2月2日付、文第2550号）に基づいて、同年3月6日に実施した。住宅新築予定地に3×3mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下140cm前後で地山を確認した。IV層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行った調査を終えた。

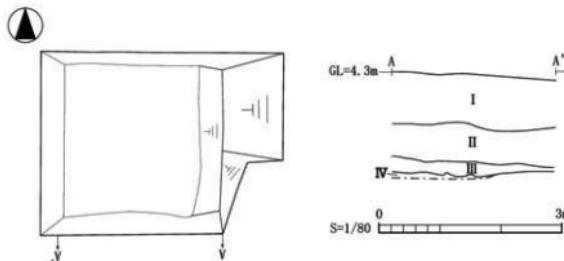
(2) 調査成果

①基本層序 層厚約80cmの表土（I層）、層厚約60cmの暗オリーブ灰色粘土質シルトの旧水田耕作土（II層）、層厚10~30cmの下部に灰白火山灰小ブロックをわずかに含む黒褐色粘土質シルト（III層）、全体的にグライ化しているにぶい黄褐色シルトの地山（IV層）の順に確認した。

②発見した遺構・遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第9図 調査地位置図



| 基本層 | | | | |
|-----|--------|--------------------|--------|----------------------|
| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 表土 | | | |
| II | 旧水田耕作土 | 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) | 粘土質シルト | |
| III | | 黒褐色 (10YR3/2) | 粘土質シルト | 下部に灰白火山灰小ブロックをわずかに含む |
| IV | 地山 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | シルト | 全体的にグライ化している |

第10図 平面・南壁断面図

(3)まとめ 今回の調査地は、粘土質の堆積層が基盤となっていることから、居住地には適さなかつたと推測できる。

(註1) 名取市教育委員会1999『下余田遺跡』名取市文化財調査報告書第42集

(註2) 名取市教育委員会2018『平成28年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第69集

(註3) 名取市教育委員会2017『平成27年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第68集

II-12. 本村遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図17)

本村遺跡は、仙台空港アクセス線付せきのした駅の北東部に所在し、旧名取川が形成した南岸の自然堤防上に立地する。東西約800m、南北約300mの範囲に広がる。標高は2.5~3.5mであり、遺跡の南北両側は地形的に低くなる。遺跡地名表には、古墳時代から平安にかけての散布地として登録されている。東側に隣接する鶴巻前遺跡は本來は一連の遺跡とみられる。近年、開発に伴う調査が数回行われており、平成24年度の個人住宅建築に伴い実施された発掘調査では、平安時代の溝跡や土塙、柱列跡等の遺構や墨書き土器などの遺物が発見されている。また、宅地造成に伴い実施された発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡や平瓦などが発見されている（註）。隣接する鶴巻前遺跡でも墨書き土器や平瓦などの一般集落にはみられないものが発見されており、遺跡の性格を考える上で重要である。今回の調査地は遺跡の南東端付近に位置する。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年11月27日付で提出された共同住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年12月1日付、文第2044号）に基づいて、平成30年1月15・16日に実施した。共同住宅新築予定地に4.5×4.5mのトレントを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下約150cmで地山を確認した。IV層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い、2日間の調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚100cmの風化疊を多く含む盛土A（I層）、層厚40cmの岩すりを多く含む盛土B（II層）、オリーブ黒色粘土質シルトの近世以降の旧水田耕作土（III層）、灰黄褐色粘土質シルトの地山（IV層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物

S D 1 溝跡

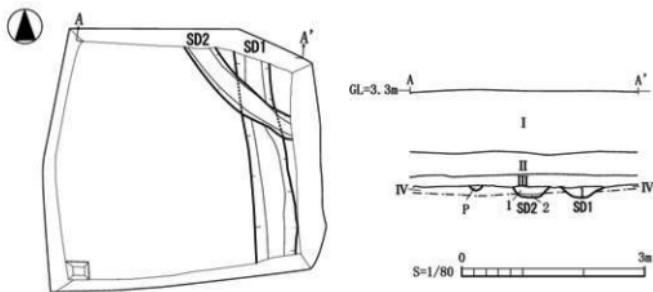
トレントの東部で検出した南北溝跡で、南・北がトレント外へと延びている。SD 2と重複し、これより古い。確認できた長さは3.3mで、上幅0.5~0.7m、下幅0.2~0.3m、深さ約20cmである。断面形は舟底状である。堆積土は褐色灰色粘土質シルトの単層で、自然堆積土である。遺物は出土していない。

S D 2 溝跡

トレントの北東部で検出した弧状をなす北西から南東方向の溝跡で、北・東がトレント外へと延びている。SD 1と重複し、これより新しい。確認できた長さは2.1mで、上幅0.3~0.5m、下幅0.1~0.3m、深さ約20cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層に分けられ、1層が地山を少量含む褐色灰色粘土質シルト、2層が地山を少量含む褐色灰色粘土質シルトである。ともに自然堆積土である。遺物は出土していない。



第1図 調査位置図



基本層

| 層位 | 層名 | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----|--------|-----------------|--------|----------|
| I | 壇土A | | | 風化繊を多く含む |
| II | 壇土B | | | 岩ぎりを多く含む |
| III | 旧水田耕作土 | オリーブ黒色(7.SY3/1) | 粘土質シルト | 近世以降 |
| IV | 地山 | 灰青褐色(10YR6/2) | 粘土質シルト | 上部は粘性が強い |

SD1, SD2

| 層位 | 測線名 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|-----|--------------|--------|---------------|
| 1 | SD1 | 褐灰色(10YR4/1) | 粘土質シルト | 自然堆積土 |
| 1 | SD2 | 褐灰色(10YR5/1) | 粘土質シルト | 自然堆積土、地山を少許含む |
| 2 | SD2 | 褐灰色(10YR4/1) | 粘土質シルト | 自然堆積土、地山を少量含む |

第2図 平面図・北壁断面図

(4)まとめ 溝跡2条が検出されたが、遺物は伴わず時期は不明である。

(註)名取市教育委員会2016『震災復興事業関連発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第65集

II-13. 北原上屋敷跡

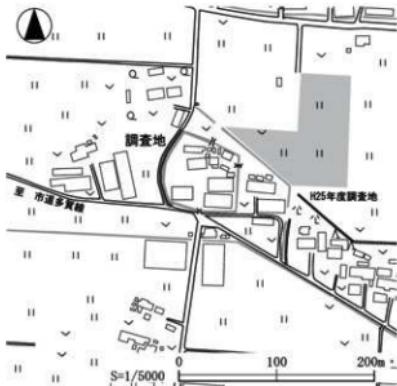
(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図18)

北原上屋敷跡は、仙台東部道路名取ICから西へ約1.2kmの地点に所在し、旧名取川により形成された標高1.5m～2.5mの自然堤防上に立地する。東西約180m、南北約160mの範囲に広がる。遺跡地名表には、近世の屋敷跡として登録されているが、詳細については不明である。平成25年度の復興事業関連の整備事業に伴う発掘調査では古代の遺構や遺物が発見され、古代の集落に関する遺構も存在することがわかっている(註)。今回の調査地は遺跡の南西付近に位置する。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年8月8日付で提出され

た市道路改良工事計画に伴う発掘通知に対する宮城県通知(同年8月18日付、文第1182号)に基づいて、同年9月7日に実施した。道路改良予定地に1.5×3.5mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行



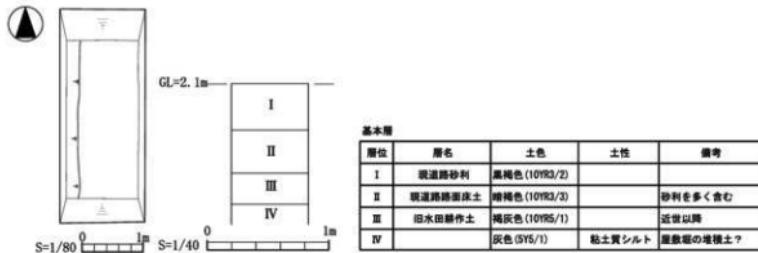
第1図 調査地位置図

い、T工事で掘削予定の深さ（GLより100cm）まで掘り下げ、図面作成と記録写真撮影の後、埋め戻しを行い調査を終えた。

（3）調査成果

①基本層序　現道路の砂利（I層）、砂利を多く含む路床土（II層）、褐灰色の近世以降の旧水田耕作土（III層）、灰色粘土質シルト（IV層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物　遺構・遺物は発見できなかった。



第2図 平面・層序模式図

（4）まとめ 北原上屋敷跡に関わる屋敷を囲む堀と推定される土塁を確認した。

（註）名取市教育委員会2016『震災復興事業開拓発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第65集

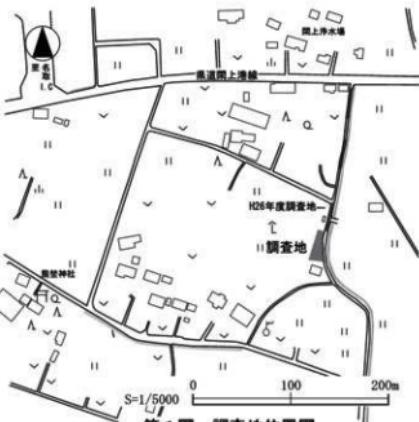
II-14. 寺田遺跡

（1）遺跡の概要（I・第1表・第1図19）

寺田遺跡は、仙台東部道路名取ICから南へ約500mの地点に所在し、旧名取川により形成された自然堤防上もしくは第II浜堤列上に立地する。東西約120m、南北約200mの範囲に広がる。遺跡地名表には中世の散布地として登録されている。平成26年度に復興事業関連の整備事業に伴う発掘調査が遺跡周辺で行われたが、遺跡の北東端付近で近・現代とみられる河道跡を確認したのみで、他に遺構・遺物は発見できなかった（註）。今回の調査地は遺跡の北東隅付近に位置する。

（2）調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成30年1月17日付で提出された個人住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年1月24日付、文第2472号）に基づいて、同年1月24日に実施した。住宅新築予定地に2×2mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、層厚約80cmの盛土（I層）とその下層で湿地堆積土（II・III層）を確認した。III層上面で遺構検出を行い、図面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。



第1図 調査位置図